東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

保育園での造形活動に参画する大学生の関与と学び：大学と学芸の森保育園の連携造形活動の報告と考察から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小室,明久, 竹,美咲, 笠原,広一, 真木,千壽子, 鉄矢,悦朗, 白神,瑛子, 肥前,新菜, 寺島,知春, 池田,晴介, 和田,賢征 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159775

東京学芸大学紀要　芸術・スポーツ科学系　72: 99－115，2020.

保育園での造形活動に参画する大学生の関与と学び

―― 大学と学芸の森保育園の連携造形活動の報告と考察から ――

小室　明久[*1]・竹　美咲[*2]・笠原　広一[*3]・真木　千壽子[*4]・鉄矢　悦朗[*5]
白神　瑛子[*6]・肥前　新菜[*7]・寺島　知春[*2]・池田　晴介[*7]・和田　賢征[*8]

美術科教育分野

（2020年6月29日受理）

KOMURO, A., TAKE, M., KASAHARA, K., MAKI, C., TETSUYA, E., SHIRAGA, E., HIZEN, N., TERASHIMA, C., IKEDA, S. and WADA, K.: Participation and leaning of students engaging in collaborative art activities with nursery school: Based on report and reflection of collaborative art activities between Tokyo Gakugei University and Gakugei-no-mori Nursery School. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 72: 99–115. (2020)　ISSN 2434–9399

Abstract

This study targets university nursery schools and collaborative art activities done by university teachers. In a series of studies focusing on collaborative art activities to date, we have clarified some basic findings regarding the sharing of the understanding of children, made possible by art activities and the 5-stage practical structure formed by the collaboration between universities and nursery schools. However, previous studies have not looked deeply into the learning of university students engaged in collaborative art activities. This study focused on the learning process of undergraduate and graduate students in collaboration with the nursery school.

Keywords: university students, childcare, art activity, art exhibition

Department of Art Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨： 本研究は大学内の保育園と大学教員が取り組んでいる連携造形活動を対象に，2019年度の取り組みを報告し，活動に参画した大学生や大学院が保育者らとどのように協働して活動を生み出し，何をどのように学んだのか，連携造形活動における学生の学びについて考察した。連携造形活動と作品展，保育者と保護者アンケートの分析と考察，大学生および大学院生による実践の考察から，学生は作品展に至るまでの保育園への定期的な関与と園での実践を繰り返すことによって，保育（者）の視点を取り入れ，園児の関心や配慮しなければいけない点を踏まえながら連携造形活動に取り組んでいったことが見えてきた。学生も園や保育士とともに作品展に至るまでの活動の過程を支えており，子ども達の活動を発展させる一因（一員）として機能していることが明らかになった。

キーワード：大学生，保育，造形活動，作品展

＊1　中部学院大学短期大学部（501-3938　岐阜県関市桐ケ丘2-1）
＊2　東京学芸大学 個人研究員（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）
＊3　東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育分野（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）
＊4　特定非営利活動法人 東京学芸大こども未来研究所 学芸の森保育園（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）
＊5　東京学芸大学 美術・書道講座 美術分野（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）
＊6　無所属
＊7　東京学芸大学大学院教育学研究科（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）
＊8　東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程美術専攻（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）

1．はじめに

本研究は2016年度以来取り組んできた大学内の保育園と大学教員が連携して行う造形活動に焦点を当てている。これまでの一連の研究を通して，子ども理解の共有化に向けた基礎的な知見の産出や，連携によって捉えることができる５段階の実践展開の構造を明らかにしてきた（笠原他，2018，2019）。しかし，これまでの連携造形活動の研究では実践に参画する大学生と大学院生の学びを深く取り上げてきてはいなかった。大学生を対象にした研究に関して湯澤ら（2018）は保育でのエピソードに着目し，大学生がエピソードの語り手となるまでの学びを検証している。また，奥西（2018）は芸術祭に参加した大学生を研究主題として取り上げ，美術教育やアートマネジメントを学ぶ学生にとって芸術祭の広報や宣伝の活動への参加が学生の学びに効果的であると述べている。これらの先行研究は大学生が実践に携わることによって多くの学びを得ていることを示している。現場との連携実践を通して子どもの育ちを研究することはもちろんだが，その場に参与する学生にも同時に学びが起きているのであり，その両面からの考察が連携造形活動の意味をより深く明らかにすることにつながると考える。

そこで本研究では「２．2019年度の連携造形活動」，「３．これまでの作品展」，「４．2019年度の子どもアートカンファレンス」，「５．大学生と大学院生の実践研究発表」，「６．委託研究による園内研修会と講演会等」と2019年度に実施した連携造形活動について概要を示し，「７．保護者へのアンケート調査」，「８．保育士へのアンケート調査」でアンケート調査の結果と考察を述べる。最後に作品展に至る一連の取り組みから「９．園での連携造形活動を支える保育士と学生の関わり」について論じる。

（小室）

2．2019年度の連携造形活動

今年度も昨年度までと同様に毎月一回，連携造形活動を行った。年度の前半である５月と６月はクレヨンと絵具を用いる描画の活動を行った（図１，２）。７月にはフィンガーペインティグの活動を実施した（図３）。９月には野菜や段ボールの素材を用いてスタンピングをする活動を行った（図４）。また，10月は活動を二回実施した。一回目は折り紙を用いて葡萄に模した作品を制作し，二回目は紙コップと紙粘土でオリジナルの帽子を制作する立体作品にも取り組んだ（図５，６）。12月は絵本作りに取り組み，１月と２月の期間で，大学生と大学院生が参画する作品展のプロジェクトを進めた（図７，８，９）。今年度も作品展では子ども達の作品だけではなく，大学生と大学院生が実施した実践報告のポスターも掲示し，実践の意図や過程の説明も行っている。

2019年度の作品展ではおばけをテーマにし，おばけにまつわる様々な作品を展示した（図10）。また，おばけをテーマにしたショートムービーも作成し，その映像を流す映画館作りも実施した。

（小室・白神）

図１　第１回５/15（水）クレヨンで絵を描こう

図２　第２回６/12（水）絵の具で絵を描こう

図３　第３回７/22（水）フィンガーペインティング

図４　第４回９/25（水）オリジナルスタンプを作ろう

図５　第５回10/16（水）ぶどうを作ろう

図６　第６回10/23（水）紙粘土で帽子を作る

図７　第７回12/11（水）扉のある絵本をつくろう

図８　第８回１/15（水）おばけと影絵あそび

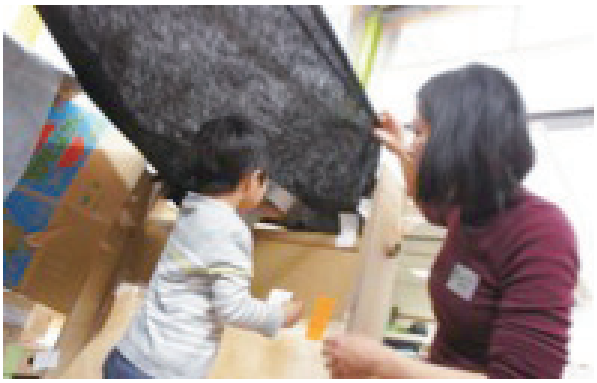

図9　第９・10回２/12・２/19（水）おばけ映画館をつくろう！

図10　作品展２/20～22 作品展―おばけのもりのさくひんてん―

３．これまでの作品展

３．１　概要

１年間の連携造形活動の作品と，年間の保育の中で作られた作品を展示する作品展を開催した。今年は「おばけ」をテーマにし，会場の中央に設置された映画館では映像作品が上映され，天井にはおばけが踊る様子をイメージした衣装を展示した。テーマに関連した作品だけでなく，身辺材を素材として用いた作品や季節を主題とした作品も展示している。作品展では，毎年，保育者が年間の活動に基づいてテーマを設け，大学生や大学院生と連携して企画をすすめており，園で日常的に行われている制作や季節の行事を意識した

作品など，園生活を感じることのできる作品をベースにして，作品展示を行っている。

大学生と大学院生は造形活動だけではなく，作品展の準備や広報用ポスター制作，実践の発表用資料も制作し，保護者や地域の人に向けて園での子ども達の活動を紹介している。活動のテーマは園の保育士と年度内の前半から打ち合わせを行い，子ども達の興味関心をもとに設定している。

（小室）

３．２　一回目の作品展（2016年度）

初年度の作品展は園にとって初めての展示となった。大学教員や大学院生，園が一緒に企画することは今回が初であり，試行錯誤の中ですすめられた。連携造形活動の作品をメインの展示物として計画し，そのほかクラスで作ったものをあわせて展示した。また，作品展と同時に子どもアートカンファレンスの前身であるギャラリートークを開催した。ギャラリートークでは大学生と大学院生が来場者に向けて作品説明を行った。目標である展示を実際に達成できたことでいくつかの課題も見えてきたのが2016年度の作品展である。例えば，月齢を記載せず展示したが，活動を行った時期も子どもの表現を見る際に重要であり，次年度のキャプションや説明パネル設置の改善に活かされた。作品展の企画立案といった計画のスケジュール調整なども含め，今後の保育に反映させるべく，事後に話し合いがもたれた。

３．３　二回目の作品展（2017年度）

第二回（2017年度）の作品展では月齢の記載，制作が行われた背景や流れにも配慮をしたキャプション作りが行われた。展示を見た人が子ども達の園での生活をイメージできるよう，季節ごとのつながりも意識して会場設営を行った。二年目からは公益財団法人日本生命財団委託研究の一環で，保護者を対象にした「子どもアートカンファレンス」を開催している。プロジェクターに活動中の子ども達の写真を映しながら園長や大学教員らが年間の連携造形活動を説明し，保育士は活動の中で捉えた子どもの様子を話した。会場に足を運んだ保護者からの意見や感想を交えつつ，年間を通した子ども達の学びの姿を共有することができた（笠原，2019）。

３．４　三回目の作品展（2018年度）

三年目（2018年度）の作品展では，新たな展示の取り組みが多く見られた。専門家による園内研修会，大学での講演会やワークショップによって普段の保育を改めて振り返る機会が設けられた。日々の保育の記録にはドキュメンテーションやポートフォリオが取り入れられるようになり，会場には展示された作品とともに子どもの写真や保育者による文章を織り交ぜることで，作品単体では見えてこなかった子ども達の園での生活の様子を表現できるようになった。子どもアートカンファレンスにおいても保育士が園での実践を来場者に向けて発表した。

３．５　四回目の作品展（2019年度）

今年度の作品展では展示を経験している保育士の人数が増えたことにより会場設営はより円滑に行われるようになった。展示された作品の隣には昨年同様保育士によるドキュメンテーションも並べられ，子ども達の園での生活の様子を伝えるための工夫がなされた。会場の中央には園児が制作した映画館が設置され，訪れた人が作品を楽しむことができるような会場作りがなされた。また今年度は2017年度より進められた公益財団法人日本生命財団平成29年度委託研究「幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の涵養と親の学習支援プログラムの構築」の事業が『アートがひらく保育と子ども理解―多様な子どもの姿を表現の共有を目指して―』（笠原，2019）として東京学芸大学出版会より刊行され，学芸の森保育園とのこれまでの活動を振り返る節目となった年でもあった。

（和田）

４．2019年度の子どもアートカンファレンス

2019年度の子どもアートカンファレンスでは０歳児から５歳児の全クラスの保育士が発表した。カンファレンスは作品展会場である東京学芸大学コミュニティセンターで開催した。

第１部：アートの表現活動を通して１年を振り返る

真木千壽子（学芸の森保育園園長）と鉄矢悦朗（特定非営利活動法人東京学芸大こども未来研究所副理事長・東京学芸大学教育学部教授）の挨拶の後に，保育士が１歳児から５歳児クラスの年間の取り組みをスライドで紹介した（図11）。

０歳児クラスによる発表

０歳児クラスの発表で報告された事例は，窓を覗いて見つけた蟻の名前を呼ぶことや，雨の中，網戸に触り，滴に驚くといった周囲の環境に興味や関心を示すことが多くなってきた日常の一場面である。

１歳児クラスによる発表

１歳児クラスでは導入の工夫や活動の環境構成について発表があった。導入では制作する道筋を保育士が用意するのではなく，子ども達の意欲や関心が湧くような活動になるよう目指したことが伝えられた。

２歳児クラスによる発表

保育士は２歳児クラスを去年から引き続き担任している。報告では絵の具から園児達が多くのことを発見した事例が発表された。また，作品展に展示している作品の活動も園児達の発見から生まれたことが報告された。

３歳児クラスによる発表

３歳児クラスでは，４・５歳の園児達と活動を共にすることによって変化していく子ども達の姿について報告された。３歳児クラスの園児達は４・５歳児クラスの園児達と一緒に遊ぶことによって活動に率先して取り組むようになった。

４歳児・５歳児クラスによる発表

４・５歳児クラスでは作品展に展示しているおばけの映画作りの経緯について報告された。クラスで話し合いを進め，ストーリーや展開など10月から準備を進めてきた。活動を通して道具や材料を用意するだけではなく，子ども達のやりたいことを形にしていく作業が大切であると伝えられた。

図11　保育者による発表

第２部：アート活動から見えてくる子どもの多様性

第２部では大学院生が大学教員（笠原）とともに年間を通して行ってきた実践を報告した。造形活動の題材について説明を行い，活動の際の園児の様子について紹介した。また，題材に取り組む園児が活動中に気付いたことや同じクラスの友達とコミュニケーションをとる様子などがスライドの写真を交えて報告された。

第３部：大学生と大学院生らによる実践報告

第３部は今年度の企画に参画した大学生と大学院生の実践報告である。作品展に展示していた実践報告のポスターの内容をもとに発表した。発表の詳細は次章にて述べるが，大学生や大学院生が活動での園児の意図や気持ちを捉えようと接していく過程から浮かび上がる子ども理解について報告した。

図12　実践研究の発表を行う大学院生

第４部：来場者とのフリートーク

来場者の保育関係者からは，３歳から５歳の子どもが共同で何かを行うことは通常は容易ではないというコメントや，保護者からは作品展の作品そのものだけではなく，作品に至る過程を知ることができたといった感想を聞くことができた。作品展やカンファレンスについての保護者の感想については後述のアンケートで詳述する。

（小室）

５．大学生と大学院生の実践研究発表

本章では，大学生と大学院生が実施した二つの実践報告の内容を紹介する。

５．１　おばけと影絵あそび

本活動はその年のテーマとして進んできた「おばけ」の延長線上に設定した活動で，担任保育者と大学院生が話し合って準備した。活動の詳細は以下のとおりである。

５．２　実践の概要

題材名：おばけと影絵あそび
日　時：2020年１月15日（水）９：30～11：00
場　所：東京学芸大 学芸の森保育園
実践者：竹 美咲，寺島知春，肥前新菜
記　録：寺島知春
参加者：13名　４歳（４名），５歳（９名）

展　開：①導入
②おばけづくり
③影絵あそび
④おばけ紹介

材　料：画用紙（黒・灰・白），ストロー，ひも，カラーセロファン（赤・青・緑・黄・透明），ペン，テープ，のり，はさみ

道　具：スクリーン（投影部にはトレーシングペーパーを使用），クリップライト

本題材はつくったおばけを光に照らして，スクリーンに映る影で遊ぶ活動である。導入では，「おばけの森保育園には色々なおばけがいるらしい…」という短い影絵の物語を見て，おばけの想像を膨らませた（図13）。導入の物語には，それぞれ異なる素材でつくられた数種類のおばけが登場する。導入の物語の後で，影の状態で見えていたおばけの本体を紹介することで，おおよそどの材料がどのような影として映るかをイメージできるようにした。導入では，影絵の基本的な仕組みである材料が光を遮った形が影になることや，使用する材料を紹介しつつ，子ども達の「おばけで影あそびをしてみたい」という気持ちを大切にした流れを意図して進めた。

図13　導入の物語ののちスクリーンに影絵として映っていたおばけの本体が登場

活動の前半では，各作業テーブルに移動し，造形材料を用いて自分のつくりたいおばけを制作した。途中，スクリーンで映り具合を試しながら，制作が進められた。後半では，再び皆でスクリーンを囲んで各自のおばけの自己紹介をした。

5．3　実践の背景

本実践が実施された時期は年度末が近づきつつあり，子ども達はこの1年間に様々な場面で造形の体験を重ねてきていた。特に5歳児クラスのメンバーの多くは，連携造形活動が始まった初年度から活動や作品展を見てきており，約3年間にわたり造形活動の体験を積み重ねてきた。卒園を控えた5歳児クラスの子ども達にとって，この時期の造形活動は1年間を締めくくるだけでなく，保育園生活の集大成へつながりうる活動でもあった。こうした実態を踏まえ，本実践が子ども達の文脈に沿ったものとなるよう，保育士からの聴き取りを重ねながら活動を準備した。

保育士によると，ハロウィンの仮装のためにつくったお面（図14）をきっかけに，秋頃から子ども達の間で「おばけ」をテーマとした活動が展開してきたという。5歳児クラスでは，特別な夜間保育の日に，おばけで保護者をもてなす活動も行なっていた。驚かせるおばけやクイズに答えられないと道を通してくれないおばけなど，保護者が来園すると様々なおばけ遊びが行われた。また，おばけ屋敷から始まった物語をもとに，おばけの劇へ展開した。さらに皆でつくった劇をページ毎に分担し，おばけ絵本づくりへと発展していった。3・4歳児クラスでは，おばけの衣装のファッションショーへと活動が発展し，子ども達が変身したおばけの写真を使って個性的なおばけ図鑑をつくる活動につながった。傘おばけ，ろくろ首，河童，提灯おばけ，化け猫，狸の腹つづみ，送り狼など，様々なおばけが生み出された。

「おばけ」をテーマとして様々な表現を生み出してきた子ども達に対して，担任の保育士が園児達と今度はおばけで何をしたいかについて話し合いの場を設けた。話し合いでは，ある子どもから造形活動の中で「影絵をしたい」という声があった。この要望に応える形で本実践の「おばけと影絵あそび」が行われた（図15）。

図14　ハロウィンで木の実等を使ってつくったお面と，お面を被った子ども達の写真でつくったペープサート

図15　ある子が描いた影絵のイメージ図

５．４　活動の展開

展開①で導入の物語を楽しんだ子ども達は，②のおばけを制作する時間に入るとすぐに材料を手に取りつくりはじめた。自分の中で繰り返してきた定番のおばけをさらに深める子や影にした時の見え方をじっくりと考えながらつくる子，素材と出会い生まれる閃きを形にする子，友達と強く影響し合いながらつくる子など，それぞれの探求がはじまった（図16）。

子ども達は制作中，自由に作業机と影絵スクリーンを行き来することが可能だった。学生達の関わりとしては，展開①④以外では子ども達に指示を出して促すことはほとんどなく，②の制作と③の影絵あそびは子ども達の主体性にゆだねられた活動となった。②③の間，大人の関わりは，基本的に子どもの活動に寄り添う姿勢で展開した。制作中に適宜，必要そうな場面で子どもに大人からスクリーンで映してみてはどうかと提案する声掛けなどを行った。よって展開②と③は明確な区切りはなく，子どもの判断に任せつつ行われたことが特徴といえよう。そのため，子どもによってスクリーンに投影する頻度やタイミングは様々である。「完成してからのお楽しみ」とあえて最後まで投影した時のおばけの姿を見ずに，制作に取り組んでいた。その姿とは対照的に，気になる素材に触れ生まれた閃きを勢いよく実行し，すぐにスクリーンへ映してみる姿もみられた。大きなカラーセロファンを何枚もつなげた子が，スクリーンの裏に立ち，大きなおばけを画面の下から上へ動かしながら投影すると，複数枚のカラーセロファンによって色が映り変わっていった。スクリーンを横目に制作をしていた子ども達や大人達が驚き，思わず「おお〜〜！」と声があがった。おばけをつくった本人は裏側から見ているため，交代してもらい自分のおばけを確認する（図17）。今回のスクリーンでの影絵は，スクリーンの裏と表で，演出側と鑑賞側が必要となる。周囲の協力を得て自分のおばけがどのように見えるか試す姿がみられた。見た人が驚くにはどのように演出をすればよいか何度も試すなど，それぞれにつくりたいおばけのイメージと見え方のすり合わせを行う姿もみられた。制作と演出の二つの段階を行き来しながら，他者の視点を意識する造形活動となった。

図16　制作中の様子

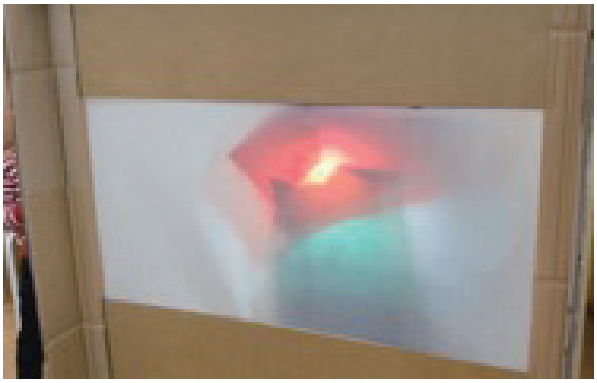

図17　スクリーンで予想外の姿をみせ皆を驚かせたおばけの影絵

５．５　考察

本実践において，②おばけ本体の制作と③影絵あそびのどちらの活動に重きをおくかは，子どもによって違いがみられた。

②おばけ本体の制作を重視した子どもは，つくる行為自体を楽しんでいたように思われた。手で素材に触れながら，自分のイメージするおばけに実体を持たせることで，自身のおばけの表現を深めているようだった。

③影絵あそびを重視した子どもは，他者からの視点を意識しているように思われた。影絵は，つくった実物とスクリーンでの見え方が変わるため，それぞれの子ども達にとって想定外の出来事が起こっていたようである。予想外のイメージとの出会いや他者との交流の中で表現を深めていく様子が見られた。

本実践において②おばけ本体の制作と③影絵あそびの活動に違いがみられた要因の一つに環境設定が挙げられる。10名以上の子どもが制作を進める中，影絵スクリーンで同時に投影できるのは２〜３人程度という

制約があった。今後より③影絵の活動へ焦点化するならば，広い壁とプロジェクターを使用するなど，大画面で同時に多人数が一度に活動できる環境設定が有効である。しかし，今回の環境構成によって生まれた協働的な活動もあるといえよう。

これまで，子ども達は様々な場面で「おばけ」という共通のテーマを深めてきた。私達大人が「おばけ」と聞いてまず想像するのは，こわい，ハロウィン，驚かせる，といったイメージであることが多い。しかし，本実践で子ども達が表現する「おばけ」は，大人がおばけという言葉を聞いて思い浮かべる印象以上に，遊びから広がった子どもの解釈があり，様々なおばけのイメージの世界が生まれてきていたことがわかる。

子ども達がつくるおばけは，こわくてドキドキするようなおばけや，可愛さで人を和ませるようなおばけ，ユーモアがあり笑顔になってしまうおばけといったように，実に多彩である。そこに，子ども達一人ひとりにとって異なるおばけへの思いや体験があることがわかる。

（竹）

図18　おばけと影絵あそび実践報告ポスター

５．６　本実践における課題

本実践では，勢いよく進行する子ども達の制作の一方で，ファシリテーター側である大学院生や大学生の間には「子ども達への支援の余地が残る」と感じられる場面が多々あった。

その代表的な例が，制作時間の最後に行った個々のおばけの自己紹介の場面だった。ここでは子ども達がつくり終えたおばけを各自でスクリーンに投影し，全員に紹介する活動をした。別々に制作された複数のおばけが同じスクリーンに一緒に映し出されることによって，おばけの間に「交流」が生まれる様子も見られた。おばけ同士の交流は，すなわち，子ども達の内面における新たな物語の誕生を意味する。新たな物語が誕生すれば，彼らの制作意欲はまた別の広がりを生む可能性がある。しかし，この可能性を多くのファシリテーターが感じつつも，時間的な制約によって活動を切り上げなければならない現実があった。

保育施設における造形活動は，多くの場合，限られた時間の中で繰り広げられる。これは当然の状況であり，時間の区切りを設けずに企画を考えようとするのはあまり現実的でない。そうではなく，子ども達の興味の喚起，制作，他者の作品の鑑賞や交流，新たな興味の誕生と持続などといった一連の支援が，有限の時間枠にバランスよく配置されるように考慮されることこそ大切だろう。

そこで，ファシリテーター側と担任保育士との連携が鍵になると考えられる。すなわち，日常の保育においてテーマがどう展開されてきたかをファシリテーター側が事前に保育士に聞き取り，よく把握しておくことが重要である。子ども達の内面に育ってきたテーマへの興味について，どのような道筋だったかを把握できれば，次に展開される造形活動の時間配分をよりよく考慮して準備することができる。こうした準備の下なら制作時に偶発的に起こった子ども達の変化をファシリテーターはより多くすくい取ることができる。このことは，テーマ自体が次の活動へと持続しつつ，さらなる拡大を見せる可能性をもたらしてくれると考える。

（寺島・竹）

５．７　おばけの映画館作り

本活動は先のおばけづくりがその後クラスで発展したことと，作品展の実施に向けた取り組みが重なって，計画された活動である。

５．８　実践の概要

題材名：おばけの映画館づくり
日　時：2020年２月12日 ２月19日
　　９：30～11：00
場　所：学芸の森保育園
実践者：竹 美咲，寺島知春，肥前新菜，

池田晴介，和田賢征
記　録：寺島知春
参加者：（2月12日）12名　4歳（5名）
　　5歳（7名）
参加者：（2月19日）14名　4歳（5名）
　　5歳（9名）
展　開：（活動1日目）①イメージの共有
　　②映画館づくり
展　開：（活動2日目）③映画上映
　　④映画館づくり
材　料：段ボール，色画用紙，不織布，紙皿，紙コップ，ストロー，テープ，ペン，

子ども達がこの活動以前につくったおばけの映画を作品展で上映したいという気持ちを受け，皆で映画館をつくる活動を2回に分けて行った。

最初に，映画館に対して一人ひとり違うイメージを持っていることを考慮し，「映画館ってどんな物があるかな？」と投げかけ，どのような映画館をつくりたいかについて共有することから始めた。子ども達はそれらを基に映画館の壁や食べ物などつくりたいものを自ら見つけ，進んで制作に取り組んでいた。

活動の2日目には，まず前回制作した作品を周りに並べた状態で映画の上映をすることで，全体をイメージした上で制作に取り組むことができるよう工夫した。

5．9　実践の背景

1月15日の活動後，影絵に音をつける遊びが日常の保育の中で始まっていた。先生がおばけの影絵を動かし，それに合わせて子どもが音をつけるという遊びである。楽器を使って不気味な音を奏でる子や，びっくりさせるために打楽器で大きな音を出す子，かっぱのおばけだからと蛇口をひねり水の音で表す子など，子ども達のおばけに対するイメージは一人ひとり違うものであった。その後も継続して紙や粘土を用いて作ったおばけをコマ撮りし，映像を撮る活動が生まれていた。それをスクリーンに映し，みんなで鑑賞した体験が映画館みたいに思えたことから，今回の「映画館づくり」へと繋がった。

（肥前）

5．10　活動の展開

はじめに展開①では，映画館のイメージを4歳から5歳の全員で共有するところから始まり，クラスの園児達が映画館にあるものや個人が作りたい映画館について発表した。子どもからは「椅子があるといいんじゃない」，「チケット売り場をつくりたい」といった意見が挙げられた。活動のメインファシリテーターは出てきたアイデアを園児達に見せながらスケッチしていった。中には自らペンを持ち，イメージを描きあらわしている子どももいた（図19）。

映画館についての皆のイメージを共有し，展開は②へと移る。本題材においても前回の題材と同様に大人は子どもに指示を出して促すのではなく，子どもの主体的な活動を支援し，寄り添う形で関わっていた。園児達は制作ができる時間になると各々つくりたいものを探し，取り掛かかっていった。教室の中心付近では複数の子どもが入れ替わりで段ボールを高く積み，大きなタワーのようなものができていった（図20）。固定するために使用していたガムテープをレンガに見立てながら貼り付けている子どももいた。タワーの周囲では，小物づくりに取り組んでいる子どもの様子があった（図21）。園児達は素材置き場から自分がつくりたいものに適する素材を見つけ，素材同士で組み合わせることや，はさみを用いて切り，マジックで色をつけるといった工夫をしながらジュースやポップコーンといった映画館にある物をつくっていた。展開②は1時間程で終了し，片付けに入った。

図19　映画館のイメージを共有する

図20　映画の画面横に段ボールが積み上げられていく

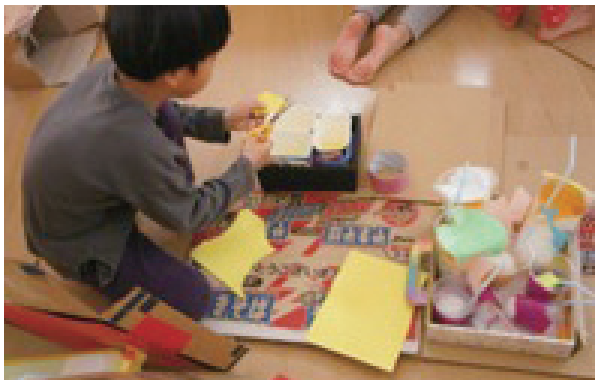

図21　ポップコーンやジュースは映画鑑賞の楽しみ

図22　自分たちでつくった映画を鑑賞

活動の２日目である展開③はあらためて子ども達に映画館を見る人の視点を意識するために行った。はじめに１日目につくったものを大人達で再び教室に配置し直し，その後，子ども達がランチルームに入って映画を上映するディスプレイの前に座って，全員で映画を鑑賞した（図22）。また，１日目の活動を振り返ることや，制作した作品を再度共有するためファシリテーターが「これは誰がつくったものですか？」と制作物を指差して尋ね，「〇〇ちゃんの！（作ったもの）」といった応答もあった。

展開④の映画館づくりでは，子ども達の制作は１日目と同じようにそれぞれつくりたいものに分かれて行われた。それまでつくっていたものを引き続き制作する子どもと，新しい制作に取り掛かる子どもの両方が見受けられた。展開④では学生も園児と共に制作を補助しつつ，手を動かす園児と一緒につくり方を考え，相互に関わり合いながら参加した。活動の中盤には映画を上映するディスプレイを囲うような壁を段ボールで制作した。さらにその上に黒い不織布を掛けて映画館独特の暗さが生まれるように工夫した。ある子どもは光が映画館の中に漏れてこないように足場をつくりながら不織布を懸命にはりめぐらせ，自分の思う映画館に近づけようと工夫していた（図23）。ジュースやポップコーンをつくっていた子どもはその後に段ボールでお店の売り場もつくり始め，飲食店やチケット売り場へと発展し，活動は映画館全体を制作する段階になっていった（図24）。活動の最後ではもう一度モニターの前に座り，上映のイメージを膨らませた。

（池田）

図23　映画館の柱の上に幕を張ると一層映画館らしくなってくる。その横では偶然生まれた形をもとに壁面に小さなおばけの装飾を潜ませている

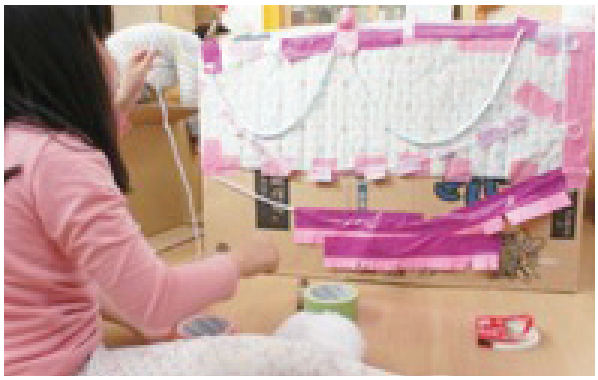

図24　チケット売り場のカウンターをつくる

５．11　考察

今回の活動はテーマを一方的に設定するのではなく，日々の園生活の中で子ども達が関心を持っているものであった「おばけ」をテーマに設定している。それによって日ごろの保育の中で子ども達自身が「おばけ」への興味を膨らませ，そこから「おばけの映画館をつくる」制作活動の方向性が生まれていった。そのため，子ども達はこのテーマに向けて集中して取り組んでいたと考えられる。また，それぞれがつくりたいものを自発的に制作し，完成させていくことができたのもこの活動の特徴であった。今回つくった映画館にある造形物には段ボールでの大掛かりなものもあれば，ジュースやチケットなど

の小さなものもあった。それは映画館という言葉に対して，子ども達が固有のスケール感や方向性で活動に取り組んだためであろう。一方向的にテーマを設定し，子ども達がそれに倣うように活動するのではなく，子ども達の多様な活動の在り方を支えるファシリテーターとしての役割によって映画館がつくられていったといえよう。また，それは学生を中心とした充実した人員の配置の結果，子ども達それぞれの活動を捉え，支援できたことも要因であると推察される。

今回のように，子ども達の日頃の保育の中から生まれる自発的な興味や関心を活動のテーマとして設定することは，全員で目指す大きなテーマがあるということと，一人ひとりがつくることを楽しむことへとつながると考えられる。それにはやはり，日々の保育の中での子どもの興味や関心を見取ることが重要と言える。

展覧会の会場では子どもが保護者に作品を見せ，ごっこ遊びをする姿も見受けられた。この映画館は展覧会の作品でありながら，子どもにとっては制作と未分化な遊びの空間であったとも言える。ここでのごっこ遊びは，子どもが鑑賞者と作品とを遊びによって結びつけているとも考えられる。この遊びの体験は，鑑賞者にとっては，子どもの作品の一部として，そこに関わっていくことであると言えるのではないだろうか。

（池田・和田）

図25　おばけの映画館づくりの実践研究発表ポスター

5．12　本実践における課題

影絵あそびの回に続いて，本実践でも時間配分の課題は生じていた。それが顕著だったのは造形活動の最後に配された鑑賞の場面だった。

子ども達は日常の保育や造形活動などの長い時間を通して，おばけというテーマをふくらませてきた。その集大成とも言える造形物が映画館であった。自分達の手から生み出されたこの作品のなかで心ゆくまでおばけの映像を見たいという気持ちも大きかっただろう。しかし，完成した映画館に子ども達が入れるようにファシリテーターらが並びを整えて，子ども達に着席してもらったときには終了の時間が差し迫っていた。短い映像作品1編を全員で見ることはできたものの，いくつも見ることはかなわなかった。子ども達からは「もっと見たい」という趣旨の訴えがあった。

時間配分の課題に関しては，影絵あそびの回でも認識されていたため，ファシリテーターは事前の打ち合わせをより綿密に行い，改善を試みていた。結果的にこれによってファシリテーター相互が全体の進行をより強く認識するようになり，実際に鑑賞の時間が始まる前までは場の雰囲気は盛り上がりを見せていた。ただし，子ども達がこれほどまでに鑑賞への欲求を抱えていたことを，事前には捉えきれていなかった。より長い時間を制作に割くことに意識を取られていたのかもしれない。日常の子ども達の様子を担任の保育士との連携によって把握しておく重要性がここでも挙げられるだろう。

ゆったりとした十分な鑑賞の時間を設けることで，子ども達自身が制作の結果を振り返れるだけではなく，個々の造形が全体とどのように調和しているかを目の当たりにすることもできる。また，保護者などの制作場面にいなかった人への紹介の仕方についても，子ども自身が考えを進めるきっかけになることもあるだろう。今回のように，あるテーマについて持続的に造形活動を行う場合には，鑑賞のもつ意味はいつにも増して大きくなる。鑑賞という行為を制作に比べて軽んじることがあってはならず，ファシリテーターにはその姿勢に対する再認識が重要であるとあらためてわかった。

（寺島・和田）

5．13　院生の研究発表から

これら２つの実践とカンファレンスでの報告を通して，院生らは自分達が実際に子ども達と造形活動を行うことと，実践の捉え方や考察する方法を学んだ。特に本実践は，フィールドの子ども達の日常の文脈に寄り添った活動の展開や支援という側面が強い。子ども

達の意欲的な姿からは，子ども達自身の興味や関心へ歩み寄った実践が彼らの学びの連続性を支えることを学んだ。また，実際に保育の現場で子ども達の学びを支える保育者との連携の重要性も強く実感した。カンファレンスでは，実践の報告を通して，保護者や保育者と接する貴重な機会となった。子どもの育ちを支える他の立場の視点を知ることもできた。

（竹）

６．委託研究による園内研修会と講演会等

６．１　実施内容

2018年度から引き続き，委託研究の一環として，園内研修と講演，ワークショップを開催した。2018年度では年間を通して研修会を行っていたが，講師スケジュール，委託研究スケジュールの関係で2019年度では７月と８月に集中させた。７月29日に開催したシンポジウムでは「アートがひらく保育と子ども理解－多様な子どもの姿と表現の共有を目指して－」と題して，これまでの委託研究で取り組んできた活動の成果を公表した。園内研修・講演会講師と内容は以下の通りである。

７月16日（火）園内研修・講演会
講　演：親子ワークショップによる表現活動を通した子ども理解の取り組み
講　師：吉川暢子（香川大学教育学部准教授）

７月29日（月）シンポジウム
テーマ：アートがひらく保育と子ども理解－多様な子どもの姿と表現の共有を目指して－
講　師：山本一成（滋賀大学教育学部講師）
小室明久（中部学院大学短期大学部助教）他

８月30日（金）親子ワークショップ
テーマ：塩を使った砂絵遊び
講　師：吉川暢子（香川大学教育学部准教授）

６．２　考察

キャンパス内にある保育園というメリットをいかし，学生，保育者，保護者に届く研究活動が継続して行ってきた情報は，保育園にも大学，そして講師を通じて学外にも広がった。さらに，書籍「アートがひらく保育と子ども理解―多様な子どもの姿と表現の共有を目指して―」（笠原広一編著，東京学芸大学出版会，2020年３月）としてこれらの研究成果は開かれた。園内研修会と講演会の成果として特筆すべきは，学生と保育者の視点からの体験の幅の拡幅だと考える。体験の幅の拡幅は，彼ら自身の保育，指導，研究の幅にも強い影響を与えた。

（笠原・鉄矢）

７．保護者へのアンケート調査

７．１　アンケート結果

過去３回の作品展同様，保護者アンケートを実施し，来場者64名から以下の回答を得た。

Q１：ご年齢をお選びください

10代未満	1名
10代	2名
20代	7名
30代	19名
40代	24名
50代	5名
60代	2名
70代以上	3名
未記入	1名

Q２：ご所属についてお聞かせください

園児の家族	44名
東京学芸大学生	4名
園児及びその家族の知人	1名
他の教育機関	2名
その他	11名
未記入	2名

Q３：ご来場の理由についてお聞かせください

園児及び家族からの案内	26名
東京学芸大学内広報	5名
保育園からの案内	29名
通りすがり	4名
その他	3名

Q４：展覧会をご覧になっていかがでしたか。
全体的な印象をお聞かせください

大変良い	50名
良い	11名
あまり良くない	0名
良くない	0名
未記入	3名

〈理由〉
（大変良い）
・子ども達一人ひとりみんなのやりたい！がつまって

いる作品展だと思いました。
・子ども達の感性が伝わってくる作品ばかりで，みていて楽しい気持ちになりました。
・少人数の保育園なのに作品がたくさん！０さいの子達の作品も思ったより数多く，見ごたえがありました。
・活動時の写真と説明が付いているのはとてもわかり易くて良いと思いました。もう少し各作品のスペースがあると更に見易いと感じました。
・展示が見やすく成長度が見てとれる。
・子ども達がいっしょうけんめい作ったことが，作品から伝わってきました。園での生活が想像できて，見ていてとてもたのしかったです。
・第一回目から見学させて頂いていますが，毎年テーマを設定しそのコンセプトのもと展示できているところが非常に良い。
・子ども達が作ったものをまとめて見られたり，活動に対する先生方の思いを聞けたのは良かったです。作品をどれも自由，大胆に製作されているように思いました。
・園児の発達の過程や指導の工夫が伺われました。
・①保育所指針にあるICTの活用がまさに実践されていて，参考事例になると思います。
②先生方のキャプションがいきいきしていてとてもよいです。
・全体的に年代で作品を見る機会があまりないので，我が子の成長を見ることができてよかった。

（良い）
・作ったもので子ども達が遊べていて良いと思いました。
・１年間を通したテーマにもとづいた活動の集大成で，いろいろなストーリーもあり拝見していてとてもおもしろかったです。

Q５：印象に残った作品がございましたらお書きください
・おばけテーマの造形，色々なアプローチの作品が本当に面白いです。すごい創造力！！おばけクイズもクスッと笑って楽しい！
・幼児クラスのペープサート（写真）顔が見えなくても楽しんでいることが身体の動きで感じられました。
・ビデオ作品。子どもの主体的な参加がにじみ出ていた。
・映画　子どものやりたいことが形になったものだから子どものやる気が伝わってくる
・映画はおもしろかったです。パラパラをもとに，子どもでも理解しやすい映像になると，子どもも達成感があるように思いました。
・幼児組さんのレストランメニュー。毛糸やおり紙をうまくつかっておいしそうなメニューを作っていたのが印象に残りました。
・おばけ映画！カンファレンスで経緯を聞いてますます感動です！
・すてきなぼうし　園児によって様々なねん土の使い方があっておもしろかったのと誰がかぶるものか考えて作られているのが素敵だと思った。
・食塩のおえかき　身近な素材で子どもが夢中になり大人もびっくりするほどきれいな作品ですね。

Q６：展示の見やすさ，作品の並べ方はいかがでしたか

大変良い	35名
良い	26名
あまり良くない	0名
良くない	0名
未記入	3名

〈理由〉
（大変良い）
・作品にとりかかっている様子の写真があり，こうやって作ったのだな，とその時の気持ちを含めて，よく分かりました。
・おばけの雰囲気をだすのに前面を黒くしてもよさそう。より絵や作品などもはえるかと。
・それぞれの子ども達の作品を１つにまとめておいてくれたのでまとめてみることができる。日付があれば成長過程がよくわかってよい。

（良い）
・やや手狭な感じはあるが，逆ににぎやかで楽しい雰囲気が伝わってきました。
・クラスがまざっての展示は説明書きと離れていたりするので少しわかりにくい感じがしました。
・作品そのものも，それぞれに味わいがあって楽しいが，それをつくり出す過程の紹介が必ず近くに掲示されていてより楽しめた。

Q７：子ども達の作品や園での造形活動についてご感想やご意見があればお書きください
・３歳～５歳が一緒に制作活動できる環境がとても良いと思いました。のびのび表現活動している様子が伝わってきました。
・子どもに何を学ばせたいかどんな能力を身につけさせたいかと，子どもの「やりたい」や制作そのものを楽しむ気持ちどちらも大切にした活動案を考えるのは難しそうだが，発見も多くて楽しそうだと感じた。

・今後も子どもの主体性を活かした造形活動をしてもらいたいです。
・与えられた事をするのではなく，子ども達でコミュニケーションをとりながらものを作り上げることのできるおもしろい取組だと思います。
・カンファレンスをきいて，どんな考えや子どもの発想で作品が出来上がったか感じられました。
・このまま，継続性を持った作品作りと並行に新しい取組みもやっていただきたい。

７．２　アンケート考察

Q1，Q2，Q3の回答から，展示の来場者の多くが保育園に通園している子どもの保護者であることがわかる。Q4の回答から，作品を通じて，保護者が子どもの園での生活や造形活動の過程を想像するきっかけとなっている。作品での展示やイベント等が来場者にとって，日々の園での生活や造形活動の理解の一助になっていることが推測される。

Q5の回答では展示の中央に設置されているおばけの映画について意見が多くあった。おばけというテーマからおばけ関連の作品が印象に残ったという意見も多いが，食塩を用いた絵や芋の立体作品なども挙げられている。

Q6の回答では制作の過程について意見があった。展覧会では保育士によるドキュメンテーションや学生の実践報告を展示することによって作品に取り組む様子や制作の過程を描写している。また，作品展会場での作品数の多さについてもコメントがある。作品の展示では年齢毎に分類し，展示していることによって見つけやすいという意見もあった。

このように作品数の多さと制作過程の描写，全学年での展示によって「作品が多くてにぎやかな雰囲気が良かった」という意見など保育園で遊ぶ子ども達全体の活発さや元気さを展覧会として表現することができたのではないだろうか。同時にクラスが混在している展示ではドキュメンテーションとそのドキュメンテーションが示す作品がどこにあるのかわかりにくいといった意見があった。写真が大きいと見やすいという意見もあり，作品説明の配置についても来場者が把握しやすい配慮が必要である。

Q7の記述では子どもの主体性を活かした活動についてコメントがある。造形活動では保育士や学生が道具や環境を用意し，意図やねらいに基づいて遊びを考案し，実践する場合もある。しかし，本実践ではクラスの子ども達から発信された意見を保育士と学生が汲み取った上で題材や企画を発案している。カンファレンスやドキュメンテーションでも題材の背景にある園児達の関心を伝えることが重要である。

（竹・小室）

８．保育士へのアンケート調査

８．１　アンケート結果

作品展実施後，園のクラス担任にそれぞれアンケートを取った。アンケートの結果は次の通りである。また，アンケートは０歳児クラスと１歳児クラス，２歳児クラスにてそれぞれ記入してもらい，３歳児クラスから５歳児クラスは代表者１名が意見を集約して記入した。

Q1：造形活動への取り組み

・季節に合わせ，又，成長をみながら出来そうな事を子ども達と一緒にやってみた。
・一人ひとりの取り組み方が，それぞれおもしろくて，子ども達の心の中をのぞいている気分になれるので。
・あそびの中で造形活動につながるような思いが子ども達の中にあると思った時に取り入れていることが多いため。
・造形活動を行う，というよりは，子どもの活動，やりたい事の中に子ども達の造形あそびが含まれていた。

Q2：作品展に取り組まれて

・０歳にとっては作品というよりは，それぞれの成長を見て感じて頂けたらと思っている。
・今年はドキュメンテーション等で“過程”に注目して欲しいと強調し，作品展中も過程とそれを知るおもしろさを伝えることに重きをおいたため保護者との“共有”ができた。
・季節物（ツリー，凧，鬼のお面等）は作ったら，飾ったり，遊んでほしいし，子ども達も持って帰りたい思いが強いので，それを作品展があるからと，残しておくことに葛藤があった。
・毎回，展示に時間がとられすぎてしまうなあという反省。

Q3：印象に残ったこと

・年長さんの映画はとても良かった。
・子ども達の造形への取り組みを日々伝えているつもりだが，意外と伝わっていない。“作品展”という催しがあることによって親も意識して耳を傾けてく

れると思った。
・子ども達の興味，関心のあったことの時期が自然と上手く合ったのでよかった。また竹さんと一緒に色々お話できたこと，大学教員とも早い時期から子どもの関心について知らせる事ができたことで一緒に準備ができてよかった。

Q4：気づいたこと・発見したこと
・0歳のぶどうのように保育者の思う形にはならなくてもそれぞれの形で素敵なものが出来た。手を加える事なくそのままで展示したがかえって良かった。
・作品展の度に子ども達，表現，造形活動が大好きになります。子ども達にとってもそんな行事となれば嬉しいです！
・自分の作品（何ヶ月も前のもの）をおぼえていて，これが自分のだとわかったことにおどろいた。まだそれだけその活動を楽しんでいたのだなとも感じた。
・子ども達の自然な流れに合った活動をすることで意欲的だし，楽しめる。行事ありきになってはいけないなあと改めて思った。

Q5：進め方について良点・改善点
・開催の時間，準備時間等について職会で話し合う。
・学生さんの発表と保育者の取り組みの発表の割合か順番を見直してみたらどうでしょう。
・展示方法を具体的に会場の広さと照らし合わせて早目にやっておけばよかった。
・造形あそびを一週早めるのはどうか。（作品展の週が最後の造形あそびではなくその前週…）。
・年末頃～年明けから大学教員や学生の方とコンタクトをとれてよかった。

Q6：作品展で取り組んでみたいこと
・新しいことを取り入れるよりも，今まで継続してきたことを引き続きできたらいいと思います。
・同じ題材とか同じ方法・素材で，年での変化などみてみたい。
・作品にかかわらず様々な表現の場とするのはどうか。今年は，本当は映画館をしたかったらしい。スタッフになりきったり，店を開いたり，叶わなければ今回の様に別日に保育の中で取り組むのもよい。

Q7：造形活動で取り組んでほしいこと
・保育者だけでは難しい，学生さんか先生達の専門的なアイディア，教材を使った造形活動（ex, 2018年度のブラックライト，私達では思い浮かばず，さすがだなぁと感心してしまいました）。
・作品展前だけではなく，年間来て頂くと学生さんの気付きにもなるかと思います。
・すぐには手に入らないものと，いつでも楽しめるものの両方を楽しんでみたい。
・忙しいとは思うが，その活動の日だけではなく普段のちょっとした時間に子ども達と遊ぶということも入ったらいいなと思う。
・自分も知らない取り組んだことのない物を子どもと一緒に興味を持って楽しめたら次につなげられる気がする。
・また，いつも手にできる物であれば，生活の中に用意しておくだけで子どもの中から新しい発想がでてくるのではないかとワクワクする。
・たくさん子どもの話，子どもの関心の向きについて話をして一緒にどんな活動ならよいかを造形あそびの方向からアドバイスが欲しい（お忙しいとは思いますが）。

Q8：カンファレンスについて
・フリートークでは指名するよりも自然と保護者側から意見が出せる環境であることが理想だなと感じました。
・カンファレンス中も展示を見にくる方がいらして，そちらの対応もするので学生や他の先生の話が聞けないのが残念。
・子どもの行き場の確保や時間の短縮など少しずつ取り組みたい。

Q9：その他
・毎年，学生さんがお手伝いか園に来てくれたりして，私も学生さんと関わることができて，貴重な経験をさせて頂きました。ありがとうございました。

8．2　アンケートの考察

Q1とQ2では保育士が連携造形活動での日々の保育を伝えようとしていることがわかる。Q3とQ4では今回のテーマである映画館に関する記述がある。作品展では子ども達が主体となり，制作するように配慮している。Q6では作品展での活動について意見が挙がった。園児が映画館のスタッフとなり，来場者である保護者を迎える展開にしようとしていたことがうかがえる。Q5とQ7，Q8では保育士が大学生に対して活動の支援や造形のアドバイスを求めていることがわかる。大学生が参画するからこそできる企画や活動に

よって園の保育がより充実したものになるようコメントされている。

アンケート結果から考えられる連携造形活動の課題は学生と園のより密な連携である。学生の定期的な園との関わりによって子ども達の関心や興味を保育士と共有することができる。保育士や園との連携がより充実した活動の発案へとつながるだろう。また，カンファレンスの時間配分や作品展のスケジュールなど日程上困難な部分もあるが，ゆとりを設けて多くの保育士や学生が取り組めるよう調整が必要である。

９．園での連携造形活動を支える保育士と学生の関わり

９．１　子ども達の活動を支える学生の取り組み

作品展開催までの一連のプロジェクトを通して，①連携造形活動②カンファレンス③研修会・講演会・ワークショップ④親子ワークショップ⑤作品展・子どもアートカンファレンス・実践報告会の５段階の展開によるサイクルが構築されている（笠原他，2019）。また，こうした５段階のサイクルは年ごとに学生や講師・保育士のメンバー構成によって少しずつ内容も変化していく。カンファレンスと作品展を含めた年間の連携造形活動は保育者にとって実践や意図を保護者に伝える場となっている。また，保護者にとっては連携造形活動によって保育を知る機会となっている。連携造形活動の研究ではこうした子ども理解を通した保育への取り組みが質的に深化していったプロセスを明らかにした（笠原他，2018）。そして，連携造形活動に参画している大学生と大学院生は自分達の実践研究の基礎を築くことができる（笠原他，2019，p.91）。

本研究における事例でも学生が題材を考案している。題材の案は園での子ども達の日々の活動での様子を捉え，反映している。今年度は「おばけ」が一連のテーマとして挙げられ，それらを取り上げた１月と２月の題材において保育士から聞き取りを行い，２月の題材では１月の題材を踏まえ，発展した活動を実施した。このような実践の背景には大学生や大学院生が目的的に作品展や活動を実施するのではなく，子ども達の活動から作品展へと結びつけ，日々の保育から題材を見出そうとしている意図がある。

佐藤（2009）は協同的な学びでの目的の生成について事例から子どもらの強い動機を捉える保育者の重要性について言及している。保育者が子どものつくりたいという動機を捉え，クラス全体に波及していくことを見通し，場と材料の環境構成を構築していく援助が保育環境に求められると述べている（p.151）。また，松本他（2012）は協同的な経験を支える保育環境についてモノの役割に着目し，協同へのプロセスにおけるモノの機能について実践が展開される年齢によって差が生じるとし，モノの特性によって子ども間に育まれる協同的な経験が制約される場合があることを挙げている（p.295）。さらに，協同的な活動の経験を支える保育環境について，子どもが感じる意欲を保育者が支え，子どもが自ら協同的な活動に赴くよう構成することが重要だという（松本他，2012，p.288）。松本も佐藤の論文を挙げ，保育者の適切な場の見通しや材料の提供が協同的な活動へと向かう点で佐藤の知見と一致すると述べている（p.296）。新野（2014）は初等教育での図画工作科において子どもが主体となり，学びを形成するモデルについて検討するなかで，子どもの主体のあり様に着目し，次のように述べる。

> ここでいう主体とは，単に思考や行動の中心という意味だけではなく，対象や他者などと具体的にかかわりながら，それらの状況に応じて自身の思考や行動をかたちづくっていく実践者のことである。したがって，図画工作科や美術科における主体的な学びとは，子ども自身の感覚を働かせながら対象や他者と関わり，そのかかわりから学びをかたちづくっていくことを指す（p.391）。

子ども自身が学びを探求していく過程では保育者が目的的に活動を提示するのではなく，子どもの生活や日々の気持ちを汲み取り，文脈を捉えることが題材や材料といった環境を構築する上で必要となる。連携造形活動に参画した大学生と大学院生は実践の背景から活動の実施に至るまで子ども達の活動を支える複数の取り組みがあった。大学生らはおばけをテーマとした一連の実践を行う前に，保育士と打ち合わせを重ね，子ども達の日常での興味や関心を聞き取り，題材を考案している。１月の実践では子ども達の間で流行していたおばけをテーマとした。２月の活動ではこれまでに制作したおばけの作品を展示する映画館を制作するに至った。日々の保育において保育士は子ども達の関心を汲み取り，次の保育へと結び付けている。連携造形活動において学生は子どもの活動への動機を捉える保育士の保育に触れる。学生は園での子ども達の生活や活動について保育士から学び，題材を設定している。実践した題材は大学教員や保育士からフィードバックを経て，学生の経験として蓄積されていく。また，保育士のアンケートの結果にあるように連携造形活動のプロジェクトに学生が組み込まれることによって学生

も園や保育士と共に子ども達の活動を支える一因（一員）として機能している。連携造形活動に取り組む学生は保育士の保育に体験的に関与し，題材の環境構成や子どもへの支援方法について学習している。

（小室）

9．2　4年の蓄積で生まれた保育者と大学生の自律的連携

こうした学生の学びの背景には，近年，園長が進めてきた人材育成の影響もある。これまでの取り組みをもとに少しずつ保育者による自律的な保育実践の展開を引き出すべく，保育者の意欲的な試みを後押しするような形で人材育成を進めているところである。連携造形活動の開始当初は園長と大学教員が主導して年間計画や毎月の活動を牽引してきたが，ここ二年ほどは保育者や学生らの情報共有によるコラボレーションを意識してきた。特に今年度は毎月の活動もできるだけ大学院生を中心に学生が保育者と打ち合わせて，子どもやクラスの様子などを共有しながら活動を計画し実行するようにしてきた。特に12月以降の活動から作品展に至るところでは，かなりのことが保育者と学生の協働の中で進んでいった。連携造形活動開始時に学部１年生だった学生らが教育実習を経て４年生になっており，この取り組みを積み重ねてきた学生や大学院生らが現場との協働を通して自分たちで活動を具体化し，それを考察する段階に入ってきたことも，こうした学びの顕在化の背景にある。それはもちろん，この４年間の取り組みの成果であると言える。

（笠原・真木）

10. まとめ

連携造形活動も４年目となり，大学と園による経験が蓄積され，作品展やアートカンファレンスも充実した内容となってきた。しかし，活動内容が広がるにつれ課題も挙げられる。まず，連携造形活動を行うにあたって年間の目標だけではなく，中長期的な視点も入れ，取り組んでいくことが必要である。これまでは１年間を目処に区切りを設け，活動に取り組んできた。入園から卒園までの一連の成長を捉えるためにも中長期的な視点を軸とした活動の計画も必要となるだろう。さらに今後の展望としては，年度毎に関わる保育士や学生は異なるため，保育士と学生の連携をより明確にし，実践の意図や背景を共有していくプロセスを明示していかなくてはいけない。サイクルに携わる保育士や保護者，大学教員，そして学生がさらに連携を深めていくことによって造形活動を軸とした保育実践のモデルとしての役割になり得るのではないだろうか。

（小室）

謝辞

ご協力いただいた特定非営利活動法人東京学芸大こども未来研究所の皆様，学芸の森保育園の職員の皆様，保護者の皆様，そして子ども達に御礼申し上げます。本研究は「公益財団法人日本生命財団 平成29年度委託研究（課題名：幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の涵養と親の学習支援プログラムの構築）」によるものです。財団事務局の皆さま，研修会・講演会講師をお引き受けいただいた講師の先生方，研究支援課及び学系事務室の皆様のご支援ご協力に心より御礼申し上げます。

文献

奥西麻由子（2018）「大学生の芸術祭参加の可能性～『中之条ビエンナーレ』における実践を通して～」，美術教育学研究50，129-136.

笠原広一，真木千壽子，鉄矢悦朗，小室明久，塚本万里（2018）「造形活動を通した子ども理解の共有化に向けた基礎的知見の産出：学芸の森保育園での連携造形活動と作品展の保育者と保護者のアンケート分析から」東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系70，65-81.

笠原広一，真木千壽子，鉄矢悦朗，加山総子，大塚菜々美，千野希帆子，白神瑛子，谷黒杏花，肥前新菜（2019）「保育園と大学との連携造形活動による保育の質的深化の試み：保育者・大学教員・大学院生・保護者の学び合いの実践構造について」東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系 71，79-93.

笠原広一編（2019）『アートがひらく保育と子ども理解：多様な子ども姿と表現の共有を目指して』東京学芸大学出版会.

佐藤康富（2009）「幼児期の協同性における目的の生成と共有の過程」，保育学研究47（2），143-152.

新野貴則（2014）「図画工作科・美術科教育における主体的な学びに関する考察：学びの主体のイメージモデル構築のための試論」，美術教育学35，383-394.

松本博雄，松井剛太，西宇宏美（2012）「幼児期の協同的経験を支える保育環境に関する研究―モノの役割に焦点をあてて―」，保育学研究 50（3），287-297.

湯澤美紀，上田敏丈，入江慶太，片平朋世（2018）「学生がエピソードの語り手となるまでの４年間の成長」，保育学研究56（3），137-148.